



| | |
|--------------|---|
| Title | 泉鏡花文学における視覚性 |
| Author(s) | 杲, 由美 |
| Citation | 大阪大学, 2004, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/44756 |
| rights | |
| Note | 著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。 |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 ^{ひので} 泉 ^ゆ 由 ^み 美

博士の専攻分野の名称 博 士 (文 学)

学 位 記 番 号 第 18310 号

学 位 授 与 年 月 日 平成 16 年 3 月 25 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第 4 条第 1 項該当

文学研究科国文学専攻

学 位 論 文 名 泉鏡花文学における視覚性

論 文 審 査 委 員 (主査)

教 授 出原 隆俊

(副査)

教 授 内藤 高 助教授 飯倉 洋一

論 文 内 容 の 要 旨

泉鏡花の作品が視覚性に富んでいることは自明のこととされてきたが、その内実の検討は曖昧なままに定説化しているくらいがある。舞台化や映画化との関連で、小説についても無前提でこの問題に言及されてきたが、内実の検討によって、作品の生成基盤の解明や作品の読みについての新たな側面を見出すことができる。舞台や映画に脚色された作品ではなく、小説テキストにおける視覚性を論じる。

本論は四部構成で、全六章、二十四節からなる。四百字詰めで約三百七十五枚、それに図版が六十枚ほどある。第一部は「作中人物の視点」として「湯島詣」を論じる。第二部は「挿絵からの摂取」として「菓草取」と「国貞ゑがく」を対象とする。第三部は「意匠の象徴性」として「日本橋」を論じる。第四部は「鏡花作品と挿絵」として「山海評判記」と「薄紅梅」を論じる。

第一部では、鏡花の〈写实的〉小説の代表と目される「湯島詣」だが、主人公の〈幻視〉とも呼ぶべき得意な視点が想定されており、それが鏡花作品の視覚性の一端をなしていることを検証する。

第二部では、鏡花作品における視覚的素材としての読本・草双紙の影響を論じる。『児雷也豪傑譚』や『善知鳥安方忠義伝』からの摂取を指摘し、鏡花の実際の視覚的体験に基づいて、モチーフが形成されたことを指摘する。

第三部では、作中人物の着用する長襦袢の意匠に注目し、それが八百屋お七を想起させるものであることを指摘した上で、そのお七像がさまざまな視覚的媒体を通じて享受されたことや、その設定が結末まで誘引することを論じる。

第四部では、対象とする作品の挿絵が、テキストとの有機的な関連においてそれぞれの作品の構想にも直接働きかけるものであることを検証する。また、本文の叙述のみからでは導き出せない作品の解釈を生み出すことを考察する。

全体を通して、鏡花の〈視覚性〉を一元的な視点から論じることは不可能で、ひとつの結論に集約することは困難だが、逆にその〈視覚性〉が多様性を備えたものであることを見極めたことが重要であるとする。そして、今後さらに、多くの作品を〈視覚性〉をめぐって、精緻に検討を重ねることの重要性を指摘する。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

各部のそれぞれにおいて、従来の研究にはなかった発見を踏まえながら、鏡花作品の〈視覚性〉の問題を正面から

検討しようという、まっとうな姿勢が貫かれている。異なるアプローチから中心的な課題に接近しようとする姿勢も十分に評価されてよい。取り分け、着物の意匠から作品全体を読み通していく「日本橋」論はきわめてユニークで鏡花作品の読解に新しい方法を導入したといえよう。また、「山海評判記」における挿絵の機能についても、まったく新しい視点であり、挿絵を含む初出の発表形態と、全集などに作品が収録された際の形態の差異が、作品の読解にかかわって大きな問題をはらんでいることの指摘も重要なものであり、ひとり鏡花作品の問題ではないことも示唆していよう。また、同時代作品を視野に入れて自作に取り込んだという指摘も、今後の研究の展開に一石を投ずるものといえる。草双紙の摂取についても従来の枠を超えようとする試みが読み取れる。

一方で論者も意識はしているものの全体の論考が有機的につながっていない側面がある。また、鏡花作品における挿絵が〈視覚性〉の問題で大きな役割を果たしているとの指摘は説得的だが、そうであれば逆に本文における〈視覚性〉がどのようなものであるのかということの検討が、やや手薄になっている観が否めない。また、草双紙の摂取の検討の一部については、まだ可能性の段階にとどまっている部分もあるように見受けられる。〈幻視〉という言葉の規定もやや厳密性を書いているとも言い得る。

しかし、全体を通して、印象的な把握にとどまっていた鏡花作品の〈視覚性〉の問題を正面から検討したことの成果は十分に評価に値するものである。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。